楽曲解説

［解説］岸 純信

7/22（金） 第882回サントリー定期シリーズ
7/24（日） 第883回オーチャード定期演奏会

プッチーニ（1858-1924）
歌劇『蝶々夫人』（演奏会形式・字幕付）

第1幕　（約50分）
第2幕　（約90分）

歌劇『蝶々夫人』の成り立ち

明治期の長崎で、アメリカ海軍士官に捨てられた日本女性が、死をもって抗議するオペラ『蝶々夫人』。その原作は、日本を訪れた米国人女性サラ・ジェーン・コレルが耳にした話を、実弟ジョン・ルーサー・ロング（1861-1927）が短編小説として発表（1898）、それを米国人デイヴィッド・ベラスコ（1853-1931）が舞台化した一幕の芝居である。この『Madame Butterfly』は1900年3月にニューヨークで初演されたが、それからすぐロンドン上演が決まり、ベラスコも現地に赴いた。

このとき、たまたまロンドンに滞在していたのが、イタリアの作曲家ジャコモ・プッチーニ（1858-1924）である。彼は、前作『トスカ』のロンドン初披露（同年7月12日）に出席すべく渡航していたが、音楽学者アッシュブロックによると、プッチーニがその折に観た二本立ての芝居の一本がベラスコの作であり（4月28日）、彼は、蝶々さんと息子とお手伝いのスズキが立ち尽くす「徹夜の場」に深く心打たれたという。

そこで作曲家は行動を起こした。ベラスコの伝記によれば、終演後、プッチーニは舞台裏に飛び込み、彼を熱く抱擁しながら「この芝居をオペラ化させて欲しい」と訴えたという。英語を解さなかった作曲家がそこまで感激した理由を想像して、ベラスコは「プッチーニはただ、自分が書こうとする音楽を、この芝居から聴き取ったのだ」と語っている。

この後、版権を得たプッチーニは、良き協力者のルイージ・イッリカ（1857-1919）とジュゼッペ・ジャコーザ（1847-1906）のコンビに台本作りを依頼した。1902年4月23日付のプッチーニの書簡（出版社主G.リコルディ宛）に、「イッリカが、日本の貞奴（さだやっこ）（欧州に著しい影響を与えた日本人女優）にインタヴューする」との一行があることは興味深い。

『蝶々夫人』全曲の完成は、プッチーニが交通事故で療養したこともあって、3年後の1903年末になった。そして1904年2月17日にミラノ・スカラ座で世界初演が行われたが、この公演は歴史的な大失敗に終わった（初日のみで上演打ち切り）。理由の一つには、リコルディ社の商売敵ソンヅォーニョ社の一派が客席に詰め掛け、大いに野次を飛ばしたことが挙げられる。夫ピンカートン役を創唱したテノール、ジョヴァンニ・ゼナテッロも後年、「客席が喧（やかま）しくてオーケストラが聴こえなかった」と証言した。

その後、プッチーニは本作を改稿し、長大な第2幕を二部に分けてピンカートンのアリア「さらば愛の家よ」を挿入した上で、ブレーシャで改訂版として上演し成功する（1904年5月28日）。彼はその後も楽譜に手を入れ続け、1906年12月28日にパリで上演した内容がほぼ現在の版になっている（細部の修正は1911年まで続いた）。

ちなみに、日本が舞台となるオペラは『蝶々夫人』が初めてではない。例えば、英国のサリヴァンの喜歌劇『ミカド』（1885）では、エキゾチックな東洋として日本を描きつつ、軍歌のトンヤレ節〈宮さん、宮さん〉を日本語のまま取り入れている。また、フランスのメサジェの歌劇『お菊さん』（1893）は長崎を描いたもう一つのオペラ。「さくらさくら」の旋律も使われている。

しかし、『蝶々夫人』は、そういった諸作とは一線を画し、より我々の心情に近づくオペラになっている。そこには、作曲者の心眼を日本的思想に向かわせる一人の女性が介在した。

駐伊公使夫人　大山久子とプッチーニ

プッチーニにインスピレーションを与えたその女性は、当時の駐伊公使夫人大山久子である（1870-1955）。彼女の孫である澤田壽夫氏の詳論（『「蝶々夫人」と祖母・大山久子』）によると、久子は夫の大山綱介と結婚後すぐに3年のパリ滞在でフランス語を習得し、オランダ、オーストリアと移ってから1895年に一度帰国したが、夫がイタリアに向かうことになり、再び欧州の地を踏んだという。

久子はローマで7年を過ごし、社交活動に多忙であったが、その間にピアノを嗜み、オペラ・アリアも歌いこなし、日本を描こうと意気込むプッチーニのために、かの幸田延から譜面を幾つも取り寄せたという（音楽学者グロスは、1901年から1904年にかけて「君が代」と「越後獅子」の2曲を入れた音源が英国で発売され、プッチーニがそれを耳にした可能性も指摘）。

ここで、プッチーニが先述のリコルディに宛てた2通の手紙（日付無し）から、久子に関するくだりを纏（まと）めて紹介してみよう。［訳文は筆者］

「［久子夫人は］多くの非常に興味深い事柄を教えてくれて、母国の歌を幾つか歌って聴かせてくれた。日本の音楽［の譜面］をいくつか送ってくれると約束してくれた。私は、彼女の為に、台本の粗筋をしたためた。彼女はそれが気に入った。（中略）。近々、大山夫人に改めて面会し、彼女が歌ってくれる音楽を採譜するつもり。彼女は非常に聡明で率直。魅力的である」。

この大山女史の能力と心栄えが、プッチーニの創造性をより刺激したことは疑うべくもないだろう。1906年に帰国後は日本に終生留まり、プッチーニからの手紙は第二次大戦の空襲で焼失したというが、彼女の助力は、『蝶々夫人』に満ちる日本の息吹の源に他ならないのである。

歌劇『蝶々夫人』の聴きどころ

第1幕　冒頭の弦楽合奏（対位法による）に打楽器が被さる辺りで、早くも日本由来のフレーズが聴かれる。海軍士官ピンカートン（テノール）と女衒（ぜげん）のゴロー（テノール）が姿を見せると、脚絆（きゃはん）を着けた男の歩く様を思わせるような弦のピツィカートが聞かれる。領事シャープレス（バリトン）を前にピンカートンが歌うアリア**「世界中どこでも〈Dovunque al mondo〉」**では、米国国歌の一節が、彼の楽天的な性格を強調する。

対照的に、蝶々さん（ソプラノ）の登場のソロ**「さあ、もう少し〈Ancora un passo, or via〉」**では、和装の緩やかな足取りにも似たラルゴのテンポでヒロインの声が朗々と響き渡り、超高音の三点変ニ音を引き伸ばすパッセージには、彼女の若くて生真面目なりが象徴される。

続いてシャープレスが蝶々さんの父親について尋ねると、クラリネット、バス・クラリネット、ファゴットと低弦で始まる和風のモティーフが奏される。これは「自殺」を表す動機であり、後に何度も再現されるもの。この後、「さくらさくら」や「お江戸日本橋」、「君が代」など日本のメロディがたびたび引用されるが、幕切れの有名な**愛の二重唱「魅惑に満ちた目をした可愛い子〈Bimba dagli occhi pieni di malìa〉」**には日本調の響きが現れず、イタリア・オペラの流麗なメロディが大らかに歌われる。なお、中間部での抒情的なヴァイオリン・ソロはヒロインの心の震えを表現するもの。その後、男女の情熱の頂点を示すべく高いハ音がユニゾンで歌われ、真の心の結びつきを表現する。

第2幕（前半）　冒頭ではお手伝いスズキ（メゾ・ソプラノ）の抑えた祈りが、蝶々さんの哀れな現況を映し出す。一方、ヒロインの名曲**「ある晴れた日に〈Un bel dì, vedremo〉」**では、アリアとしての完成度もさることながら、直前のスズキとの真実味あるやりとりも、状況を掘り下げる一助となっている。続いて、領事シャープレスが、蝶々さんにお

大尽（裕福で身分も高い男）ヤマドリ（バリトン）との再婚を勧めるシーンでは、憎まれ役ゴローの言葉が、残酷な現実を炙り出す。

この後、領事シャープレスがピンカートンの手紙を淡々と読んで聞かせてから**（手紙の二重唱）**、「彼が貴女のもとに戻らなかったらどうしますか？」と訊ねると、蝶々さんは衝撃を受け、「私に出来るのは、芸者に戻るか死ぬか」と話す。シャープレスが「夢から覚めるために……」と口にすると彼女は怒り、別室から連れてきた子供を引き合わせ、**アリア「坊やの母さんは〈Che tua madre dovrà〉」**を切々と歌う。

領事が帰途に就いてまもなく、突然の砲声が米国軍艦の入港を伝える。すると「ある晴れた日に」のメロディが再現され、蝶々さんの希望も**「あの方は帰ってくる、私を愛している！〈Ei torna e m'ama!〉」**のドラマティックな一言に結実する。

この後、蝶々さんとスズキのうきうきした**デュエット「花の二重唱」**に続いて、前半を締め括る〈ハミング・コーラス〉が始まる。芝居を観たプッチーニが最も感動した名場面をもとに、変ロ長調の穏やかなトーンの中、合唱団のハミングが弦と木管と共にしっとりと広がるさまに耳を欹（そばだ）てて頂こう。

第2幕（後半）　ドビュッシーのオペラ『ペレアスとメリザンド』を思わせる水夫の掛け声から始まり、夜明けを描く間奏曲では賑やかな鳥の声も表現される。この後ドラマは急展開を迎え、まずは、現れたピンカートンとシャープレス、彼らに食い下がるスズキが**三重唱**を歌い、隠れた名場面としてそれぞれの胸中を掘り下げる。続いてピンカートンの後悔の**アリア「さらば愛の家よ〈Addio, fiorito asil〉」**は、軽薄な男でも成長の可能性ありと示す象徴的な一曲。入れ替わりに蝶々さんが登場し、全てを悟って自害を決意する。ティンパニの連打が緊迫感を煽り、いよいよ覚悟を決めたそのとき、子供が姿を見せる。彼女は悲痛な**アリア「お前、小さな神様であるお前！〈Tu, tu, piccolo Iddio!〉」**を絶唱し、子供を押しやってから、大和撫子の誇りを貫くべく、刃を我が身に向ける。ピンカートンの呼び声が虚しく響く中、和のフレーズが物語を劇的に締め括る。

［楽器編成］ フルート3（3番はピッコロ持ち替え）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チンバッソ、ティンパニ、打楽器（小太鼓、大太鼓、トライアングル、シンバル、グロッケンシュピール、チャイム、鉦、鐘、タムタム、鳥笛）、ハープ、弦楽5部

きし・すみのぶ（オペラ研究家）／1963年生まれ。『音楽の友』『レコード芸術』『ぶらあぼ』『音楽現代』『モーストリー・クラシック』や公演プログラムに寄稿。CD＆DVDの解説多数。NHK「ららら♪クラシック」「オペラファンタスティカ」等出演。著書『オペラは手ごわい』（春秋社）、訳書『マリア・カラスという生きかた』（音楽之友社）など。大阪大学非常勤講師（オペラ史）。新国立劇場オペラ専門委員。静岡国際オペラコンクール企画運営委員。